

日本の高校生における医薬品教育を受けた自覚と医薬品に関する知識、態度および行動との関係

著者らの研究グループはこれまで、日本全国の小学生、中学生、高校生の医薬品使用、日本全国の中学校での医薬品教育の実施状況、岐阜県の高校生の医薬品教育を受けた自覚について調査してきた。しかし、2014年から新たに導入された中学校での医薬品教育の経験と医薬品使用との関係を日本全国規模で評価した研究は2017年の段階においては見当たらなかった。

そこで著者らは2017年に、日本全国の高等学校81校の1年生(回答数17,709名,有効回答数17,437名(男子8,205名,女子9,232名),有効回答率は98.46%)を対象として、無記名自記入式の質問紙調査を実施した。調査の内容は健康管理・医薬品使用、医薬品適正使用に関する行動、態度、医薬品に関する認識、理解、そして医薬品教育を受けた自覚であり、医薬品教育を受けた自覚の有無と、医薬品適正使用に関する行動、態度、医薬品に関する認識、理解との関連を明らかにすることを主な目的とした。

主な結果を図1、図2に示した。

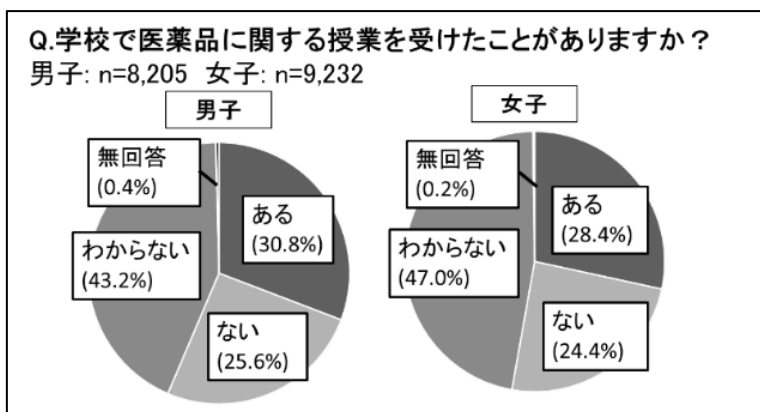


図1 医薬品に関する授業を受けた自覚

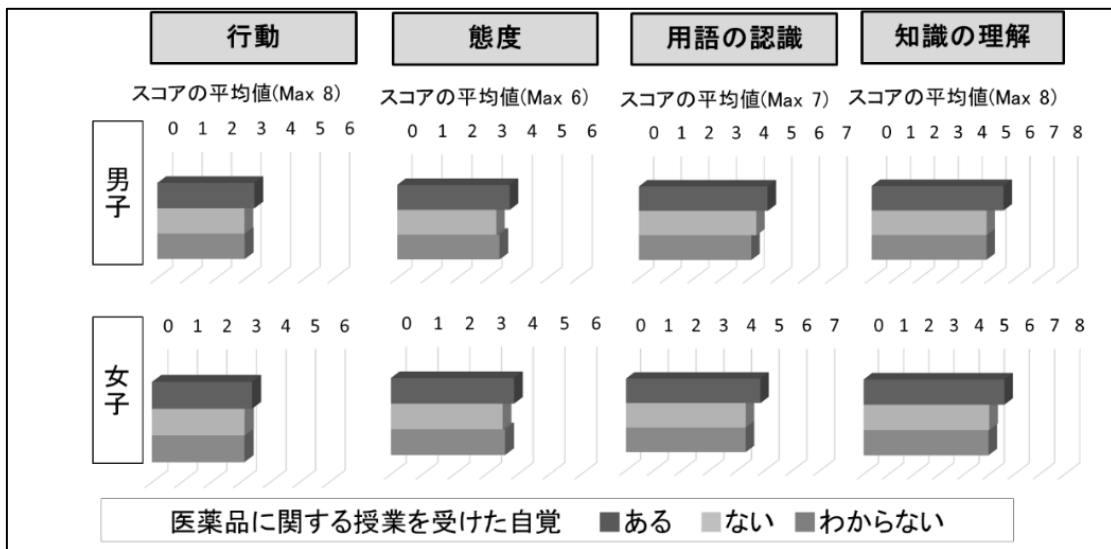


図 2 医薬品に関する授業を受けた自覚と知識，行動および態度との関係

学校で医薬品教育を受けた自覚について，授業を受けたことが「ある」と回答した生徒は 29.5%であり，「ない」が 19.5%，「わからない」が 45.2%であった。

また，医薬品教育を受けた自覚と医薬品に関する行動と態度，用語の知識，知正しい使い方に関する知識との関係については，男女ともに，医薬品適正使用に関する行動と態度，用語の認識，知識の理解の全ての項目において，授業を受けた自覚が「ある」と回答した群が，「ない」または「わからない」と回答した群より，全項目のスコアの平均値が有意に高かった。

本研究の知見より，記憶に残る医薬品教育は生徒の正しい医薬品使用を促すことに有効であることが示唆された。しかし，本研究では多くの生徒が医薬品教育を受けたことを覚えていないことが明らかとなり，今後は，有効性が確認された医薬品教育プログラムの開発と普及が必要であると考えられた。更に，医薬品教育の授業の実施状況についても更なる調査が必要であると示唆された。

【発表論文】

Chihiro Sakai, Kazuhiro Iguchi, Tomoya Tachi, Yoshihiro Noguchi, Shingo Katsuno and Hitomi Teramachi, Association Between Awareness of Taking Education on Medicines and Knowledge, Attitudes and Behavior about Medicines Among Japanese High School Students, School Health, 15, 43-53, 2019